

このひと

～ Special Interview ～

被災者ファーストが 当たり前になるように

(一社) 避難所・避難生活学会常任理事
Jボックス(株) 代表取締役

みずたに よしひろ
水谷 嘉浩 さん



災害時の避難所で必需品となった段ボールベッドを開発した水谷嘉浩さん。避難所の生活の質を上げるための検証・研究を行う学会を立ち上げ、能登半島地震の被災地にも足を運び続けている。活動のきっかけや思い、今後について伺った。

◇ 社会のために存在するということ

一段ボールベッドをつくる、そのきっかけは？

生まれた家は昭和26年から続く大阪の段ボール製造会社。大学卒業後、同業他社で働いたあと、3代目として会社を継ぎました。このときの経営状態はガタガタで、会社とは？ 経営者とは？ をとことん追求します。社会に貢献する、それがたどり着いた答えでした。当時、世間では経営効率化のひとつとして雇用の非正規化が進められていましたが、逆に私はすべての従業員を正社員にしました。定年退職制度もなくし、障害者雇用、子育て手当などを手厚くしました。それは経営者としての社会貢献の一步でもありました。

東日本大震災が起きたとき、東京に出張中でした。東北から離れた東京でさえ、恐怖を覚えるほどの強い揺れや津波の映像が頭から離れず、いてもたってもいられなくて3月14日から友人たちと

物資の搬送を始めました。でも労力の割には成果がみえず、焼け石に水という感じでした。悔しい気持ちで過ごす中、避難所の寒さが原因で亡くなる状況があると知ります。冷たい床での雑魚寝を回避するため、段ボールでベッドがつかれないかと思い立ちました。試行錯誤して制作し、毎週末、関西から東北の避難所に自ら運び込みました。

◇ 災害関連死をなくしたい、無理解を破壊したい — 活動を続ける中でのご苦労とやりがいは？

けれども9割の避難所で、いらないと断られるのです。せっかく助かった命を避難所でなくしてほしくない、徹夜で往復している私にとって「なんでなん」という思いでした。そのような中でも、段ボールベッドを使った女性が「久しぶりによく眠れたので、今日からがんばってみようと思った」と話してくれたのです。避難所の質の向上が立ち上がる力につながると感じた瞬間でした。

前例がない、雑魚寝で大丈夫と受け取ってもらえない状況がある中、事前に防災協定を結ぶことで、救援物資としての受け入れがスムーズに運ぶと知り、全国の自治体と協定を結ぶ活動を始めました。



被災地の避難所に足を運び話を聞きます。
災害は真夏にも起こります。近年の酷暑の中、電気、水道
などが止まってしまうことを想定した避難所訓練なども
行っています。

「酷暑期避難所演習」の様子はこちら→



段ボールベッドを使用した避難所。

◆被災しても生活の質を落とさない

—今後の展開は？

能登半島地震発災後すぐから何回も現地に入っていますが、避難所は悲惨な状況でした。視察に行ったイタリアでは、トイレ、キッチン、ベッドを発災後48時間内に提供する被災者ファーストが当たり前です。被災した自治体の職員が避難所運営に当たることもありません。「なぜ」と聞いたら「被災者だから」という答えでした。絶望と闘っている被災者に、手厚く支援することで傷が早く癒え、復興のスピードが上がるという考えです。

日本の避難所では物資を運ぶときなどに“バケツリレー”が行われます。これは戦時中の光景ですよ。人権という観点が抜け落ち、いかに立ち遅れているかがわかります。国や行政の方と話すと、「災害はあってはならないこと」という前置きが多いのです。災害を穢れのように扱っているのがわかります。被災しても生活の質を落とさない、災害関連死をゼロにする、そのための法律改正へのはたらきかけを続けています。

誰もが被災者になり得ます。そのときの状況にもっと関心が集まるよう、発信も続けていきたいです。

CLOSE UP



(一社) 避難所・避難生活学会

東日本大震災発災時、被災地の避難所で段ボールベッドの受け入れを断られることが多い中、絶対に必要だと言ってくれた赤十字病院のドクターらと立ち上げました。災害関連死を出さない安全な避難所環境と尊厳ある避難生活が日本の標準となることを目指しています。



私の資源

公共心

なんでこんなに「被災地」を走り回っているんだろうと考えると、自分の中にある公共心からだと思います。自分より弱い立場の人の味方でありたいです。強い人は闘う相手ですね。実は我が子も社会貢献をし始めています。がんばればがんばるほど、しんどくなることを知っているので、無理をしないでほしいとも思います。

(一社) 避難所・避難生活学会
<https://dsrll.jp>

